専念寺通信

十二月号（ＮＯ．１１２）

http://sennenji.s296.xrea.com/

今年ももう師走、一年の最後の月になりました。天気予報では暖冬とのことですが、吹く風は冷たく、新型インフルエンザがますます流行しています。皆さま、おかわりなくお過ごしですか？ことし最後の『通信』をお届けします。

☆世界と日本

日本は四方を海に囲まれ、いわゆる「極東」と呼ばれる場所に位置しています。世界地図で見ると、ヨーロッパ大陸があり、中国があり､そのさらに東に細長い島として､日本列島はあります。陸続きに隣の国がないために、いくつかの特長的な点が、私たちの国にはありました。たくさんの人種がともに住むこともあまりなく、陸伝いにいつのまにか「入国」してくる人々もなく、多民族・多宗教・多言語の国にくらべれば、ずいぶんと「楽な」部分も多くある国だったといえます。むろん、ひとつの国がひとつの国として成り立つためには、ほかの国との連携や共存が必要なわけですが、２０世紀の後半、そして２１世紀に入って、急速な変化が訪れていると思われます。交通網の普及、インターネットの普及と、そして世界の経済格差などが関係し、私たちの国では、毎日食べるものひとつも、着る服一枚も、外国の協力なくしては済まないことがはっきりしました。さらに、大国が経済危機におちいるとその影響は、信じられないスピードでこの極東の島にまでやって来ることも。地図で見ると、海に囲まれたはずれにある地味な島国ですが、実はとてもあやういバランスの上にかろうじて立っているのだと実感されます。２１世紀に入って９年、世界と私たちの国は今まで誰も経験したことのない状況にすすんでいくことになりそうです。経済の点でも、気候の点でも、そしてそれらが絡み合った争いの起こる可能性の点でも。毎号、さまざまなことを皆さまと一緒に考えてまいりましたが、今月は次の言葉をご紹介させていただき、未知の時代へ踏み出す智慧のひとつにして頂けたらと思います。

「ああ、もったいなし　この掌はどちらにあはせたものか　いま日がはいる
うしろには　月がでている」

これは､山村暮鳥という詩人の言葉です。（『月夜の牡丹』より・・岡井隆著『けさのことば』砂子屋書房　３１５頁）山村暮鳥はキリスト教の伝道師であり、それでいて仏典を好んで読んだ、と同著にあります。この「太陽や月への合掌は、宗派をこえた宗教心なのではあるまいか。」と。沈んでいく太陽に掌を合わせたい、けれど昇ってくる月にも合掌したいのだ、と暮鳥は思ったのです。

２１世紀を生きていくための重要なヒントがここにあります。ものすごいスピードで世界が進んでいくかに見えるいま、さまざまな物事がからまりあって、ときほぐす糸口を探すのがむずかしいときに、私たちはいったん立ち止まり、こころを鎮めて掌を合わせましょう。人間を越えたものに。それから考えましょう。自分にできることは何かを。できることを実行していきましょう。

☆ちいさなお知らせ：「国境なき医師団」の募金箱がかなり重たくなってきましたので、郵便局に持参しました。一年間で１１７９５円になっていました！皆さまが本堂に置いて下さった浄財もすべていっしょです。ありがとうございました。これからもこつこつと集めて参ります。新しい年が皆さまにとって良い年でありますようお祈り申し上げます。

平成２１年１２月１日　　大黒